

『源氏物語』「鈴虫」巻の本文異同を 古典語彙のシソーラスから読む

伊藤鉄也（国文学研究資料館） 大内英範（早稲田大学）

『源氏物語』の本文は、さまざまな形で伝流してきた。近年は、藤原定家が校訂した本の形態を伝える、いわゆる「青表紙大島本」が流布本の地位を獲得している。しかし、『源氏物語』の本文研究は、依然として不徹底のままである。『源氏物語』の本文系統は、池田亀鑑氏が60年前に、形態の特徴から三つに分類したものを、今に継承している。いわゆる、「青表紙本」「河内本」「別本」である。これほど長期間にわたって『源氏物語』の本文研究が進展していないことは、あまり気づかれていない。

本考察の眼目は、『源氏物語』の各写本の位相を本文異同から見る点にある。諸本間の本文の違いから、その質的な差異にまで言及していくのである。今回取り上げる「鈴虫」巻は、新2千円札の図案となったことで話題になっている。

この「鈴虫」巻に関して、すでに、30種類にのぼる写本の本文をデータベース化し終えた。そして、文節に区切った本文の違いを数値に置き換えて、諸本がどのような位置や関係にあるのかを見ることができるようになった。次の段階は、単に文字表記の違いだけではなく、物語の内容に踏み込むことである。多くの異同の要素を見ることによって、写本間の本文の特性の違いを考察していきたい。

A study of variant texts of The tale of Genji, in "The Bell Cricket" (Suzumushi) chapter.

-Using thesaurus of Japanese classical vocabulary-

Ito Tetsuya (National Institute of Japanese Literature)
Ouchi Hidenori (Waseda University)

The text of The tale of Genji has come down to us in several variant versions. In recent years, the "Aobyoshi Oshima-bon" - a version derived from a text revised by Fujiwara no Teika - has acquired the position of most popular edition. However, a thorough textual analysis of the Genji has yet to be done. The system used to describe the variant versions of the Genji adopts a classification devised by Ikeda Kikan over 60 years ago. This system divides all texts into three lines: the Aobyoshi-bon, the Kawachi-bon, the Beppon. Few people realize that no progress has been made in the textual analysis of the Genji for many years. The main purpose of the present study is to analyze ever manuscript of the Genji for textual variants. Based on the differences between various texts, I will go on to discuss the qualitative differences between them.

"The Bell Cricket" (Suzumushi) chapter of the Genji has recently been in the news, as it is being used in the design of the new 2,000-yen back-notes. For this chapter I have already made a Data-base based on no fewer than thirty manuscripts. By assigning a number to every textual variant, I am able to observe the changes in the variant's position relationship to other variants from manuscript to manuscript. The next step is to move be toned a mere rotational system for such variants, and to enter into the contents of the story. By examining the variations of specific manuscripts, I hope to explore the specific characteristics of these variant texts.

I.はじめに

現在『源氏物語』は、藤原定家の手を経た青表紙本といわれる「大島本」で読まれるのが当たり前になっている。しかし、鎌倉時代以来の異本・異文も数多く伝流していることもまた事実である。大島本が伝える本文の歴史的価値はそれとして、それ以外の本文を読み、違う物語世界を確認することは、作品理解の上で重要である。

今年7月に発行されたミレニアム紙幣2000円札の裏面には、源氏物語絵巻の絵と詞書、それに作者紫式部が図柄として採用されている。ここでとられた絵と詞書は、第38巻である「鈴虫」巻のものであるが、この詞書本文と、上記の大島本の本文にはかなりの異同が見られるのである。特に、現在入力済みの30本にもものほる源氏物語の写本・板本の本文のいずれとも異なる独自異文をも含むものであり、注目される。ただ、残念ながら、絵巻の詞書は、残されている本文の量がきわめて少なく、283文節にすぎない。本文の特性を見るにはやはりまとまった量の本文を扱わなくてはならない。

本研究では内容に踏み込んで写本の特性を考えるために、シソーラスの概念を導入する。これにより、写本ごとにどのような単語の出現傾向があるのかをみることができ、さらに、それらの単語の上位概念まで見ることによって、単純な文字列比較では見えてこなかった、写本それぞれの世界が見えてくるのである。

具体的には大島本・尾州家河内本・国冬本・言経本の4本を比較し、それぞれの本文の特性を、シソーラスからどのぐらい読みとることが出来るのか、考えてみたい。ここで扱うシソーラスは大阪大学伊井春樹氏の提唱する「日本古典文学総合事典」である。また、NDK（日本データベース研究会）の作成になる、感情語・色彩語のリストによる番号付けの手法も合わせて使用した。

II.これまでの取り組みー加重相加平均処理ー

これは伊藤が長年取り組んできた手法であり、写本の距離をはかるためのものである。一定の成果をあげており、これからも有効だと考えるが、あくまでも文字列の比較であり、内容面から見た写本の特性にまで踏み込むものではない。

詳細は <http://www.nijl.ac.jp/personal/ito/HTML/kaken97/kaken97.html>

<http://www.nijl.ac.jp/personal/ito/HTML/kaken98/1236.html>

を参照のこと。

III.番号付け

1.日本古典文学総合事典

本研究において、写本の特性を比較するために重要な指標としたのが、伊井春樹氏の提唱するシソーラス、「日本古典文学総合事典」である。これは古典作品の本文に出現するほとんどすべての名詞に番号を付したものである。番号はその名詞の意味により階層化さ

れており、番号の上位桁をたどることで、意味の上でも上位概念にたどりつくことができる。これによって、古典作品に出現するほとんどの名詞をその上位概念で括ることが可能になる。これは単純に文字列で検索するよりもよりきめの細かい検索を可能にする。たとえば、本文中に「文章生」という文字列があれば、そこには0623211500という番号が与えられる。その上位概念の番号0623210000は大学寮の番号であり、上位5桁で検索をすることによって「文章生」と同様に大学寮に属する他の職掌や施設、たとえば「明法博士(0623213000)」や「勸学院(0623218400)」などをひとまとめにして抜き出すことができるのである。

官職官位 06

八省(中央官制) 23

大学寮(式部省) 21

文章生(大学寮) 15 ← 0623211500 (末尾00は予備)

写本の特性を見る際に、このシソーラスを用いた理由は以下の通りである。単純な文字列による比較では、写本同士の距離を測ることは可能でも、その写本独自の物語世界を見ることができない。内容にまで踏み込んでこれを考えるとき、どのような意味内容の語句の出入りがあるのかを見なければならぬからである。どのような概念の語句の出入りがあるのか、その傾向を知るためには、単なる文字列比較ではなく、ある程度のまとまりを持った概念によってさまざまな言葉を括ったシソーラスが必要なのである。

伊井氏の「日本古典文学総合事典」はまだ発展途上であり、これから種々の作品の本文から名詞を登録していくことで、より優れたシソーラスになるはずである。

2.感情語・色彩語

今回は前節に述べた「日本古典文学総合事典」による番号付けのほかに、感情語・色彩語の番号付けも行った。これはNDK(日本文学データベース研究会)によるもので、その成果は昨年発刊の「角川古典大観 CD-ROM 源氏物語」に応用された。名詞のみならず、形容詞・形容動詞や一部の副詞・動詞などをも含む、これらのデータを用いることで、よりきめの細かい内容分析が可能になる。

3.人物番号

源氏物語には数百人もの人物が登場する。その1人1人に番号を付し、該当する文節に付した。これにより、ある本でのみ特定の箇所が登場する人物、というような検索が可能になる。人物呼称はその時点での官職による場合や、単に「人」とでてくる場合などさまざまなので、この作業はほぼ手作業に頼らざるを得ない。

Ⅳ.番号付けの過程

現在、諸本の本文データは図のように整理している。すなわち、すべての本文をまず文

節に区切り、その文節中の自立語について、品詞や番号などの情報を付加していくのである。

	A	C	D	E	F	H	I	J	K	L	M	O	P
1	文節番号	大島本	国冬本	言経本	尾州本	品詞	基本形	色彩語	感情語	分類番号	分類表記	人物番号	人物名
1111	3800111000	ほとけの	仏の	仏の	仏の	名	ほとけ			441005000	仏(仏教)		
1112	3800111100	御まへに	御まへに	御まへに	おまへに	名	おまへ			131003900	御前(位置)		
1113	3800111200	宮	みや	宮	宮	名	みや			532062300	宮(皇族)	4920	女三の宮2
1114	3800111300	おはして	おはしまし	おはしまし	おはして	動サ変	おはす						
1115	3800111400	はしちかう	ナシ	はしちかう	はしちかく	形	はしちかし						
1116	3800111500	なかめ給	ナシ	なかめて	なかめた	動下二	ながむ						
1117	3800111600	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	補動四	たまふ						
1118	3800111700	ねんす	ナシ	ねんす	ねむす	名	ねんず			441504690	念誦(祈願)		
1119	3800111800	し	ナシ	し	し	動サ変	す						
1120	3800111900	給	ナシ	給	給	補動四	たまふ						
1121	3800112000	わかき	ナシ	わかき	わかき	形	わかし						
1122	3800112100	あま君たち	あまたち	あま君たち	あまきみた	名	あまきみたち			442400130	尼君たち(尼)		
1123	3800112200	二三人	ナシ	二三人	二三人	名	にさんにん			1135002080	二三人(人数)		
1124	3800112300	ナシ	ナシ	仏に/\$	ナシ	名	ほとけ						
1125	3800112400	花	はな	花	花	名	はな	sl 52		2350000000	花(植物)		
1126	3800112500	たてまつる	たてまつる	たてまつる	たてまつる	動四	たてまつる						
1127	3800112600	ならす	なとす	ならす	ならす	動四	ならす						
1128	3800112700	あかつぎの	あか月の	あかつぎの	あかつぎ	名	あかつぎ			442200400	間伽杯(仏具)		
1129	3800112800	をと	をと	をと	おと	名	おと			143600000	音(異変)		
1130	3800112900	水の	みの	水の	みつの	名	みづ			1211000000	水(天然物質)		
1131	3800113000	気はひなと	けはひなと	気はひなと	けはひなと	名	けはひ			142001780	気配(現象)		
1132	3800113100	ぎこゆる	ナシ	聞ゆる	ぎこゆる	動下二	ぎこゆ						
1133	3800113200	さま	さまこと	さま	さま	名	さま						
1134	3800113300	かはりたる	ナシ	かはりたる	かはりたる	動四	かはる						
1135	3800113400	いとなみに	いとなみに	いとなみに	いとなみに	名	いとなみ			442000600	営み(動行)		
1136	3800113500	そきあへ	ナシ	そきあへ	そきあへ	動四	そきあふ						
1137	3800113600	いと	いと	いと	いと	副	いと						
1138	3800113700	あはれなる	ナシ	哀に/哀+あはれ	な	形動	あはれなり		K013				
1139	3800113800	ナシ	ナシ	みゆ/\$	ナシ	動下二	みゆ						

この作業はまず大島本の本文について、ある程度の自動処理で行われる。大島本と他本では、文字列においては多くの本で 90%以上、今回取り上げた言経本で 80%が合致するのであるから、とりあえず大島本の処理をしまえば、他本の処理もかなり楽になるからである。自動処理後、手作業で修正を加える。

他本もまずある程度の自動処理後、手作業で完全に文節に区切る。その上で大島本の付加情報を与えれば、理論上は 80%、90%の作業が終了することになる。しかし、大島本の文節数と他本の文節数は、異同によって、文節数が異なる。また、ほぼ同様の文にも、部分的に異なる自立語を持つ文節があることもある。そのような場合、たとえば大島本にあって、国冬本にない文節は、該当する国冬本の文節を「ナシ」と処理する。逆の場合には大島本の文節を「ナシ」として、国冬本の文節に含まれる自立語に対応する品詞情報や番号を付加する。

そのようにして今回の考察の対象とした 4 本を処理したものが上図である。また、それぞれの文節数も表に示したが、100 文節以上もの違いがあるのがわかる。

V. 処理後に見えるさまざまな物語世界

以上に述べた処理を施すことで見えてくる諸本それぞれに独自な物語世界の一端を見て、まとめたい。

前節までに述べたような処理の後、1 本にあって他の本にない文節の数をカウントしてみると、以下ようになった。

- 大島にあって言経にない文節： 32
- 大島にあって国冬にない文節：242
- 大島にあって尾州にない文節： 4
- 国冬にあって大島にない文節：348
- 国冬にあって言経にない文節：295
- 国冬にあって尾州にない文節：336
- 言経にあって大島にない文節：148
- 言経にあって国冬にない文節：305
- 言経にあって尾州にない文節：137
- 尾州にあって大島にない文節： 20
- 尾州にあって国冬にない文節：246
- 尾州にあって言経にない文節： 37

○を付したのは国冬本に関わるものであるが、他本と比べて 300 文節前後の出入りがあるということを示している。この数字だけを見ても、4 本中にあって国冬本がかなり特異な存在であるということがわかる。

もっとも数字の大きな「国冬にあって大島にない文節」を見てみよう。前節までに述べた数種類の番号付けをした中で、内容にまで踏み込んで考えてみたい箇所を以下に挙げる。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1	文節番号	国冬本	品詞	基本形	色彩語	感情語	分類番号	分類表記	人物番号	人物表記
2	3800101300	おとしは	名	おとし			2013110860	大殿（貴族）	3880	光源氏
3	3800101400	心うしと	形	こころうし		k118				
4	3800101500	思ひ	動四	おもふ						
5	3800101600	ぎこえ	補動下二	ぎこゆ						
6	3800101700	給し	補動四	たまふ						
7	3800101800	ことも	名	こと						
8	3800101900	みな	名	みな						
9	3800102000	すぎにし	動上二	すぐ						
10	3800102100	かたに	名	かた						
11	3800102200	なりかはりたる	動四	なりかはる						
12	3800102300	よなれは	名	よ			451578000	世（俗世）		
13	3800102400	このころも	名	このころ						
14	3800102500	かた／＼に	名	かたかた						
15	3800102600	つらく	形	つらし		k185				
16	3800102700	あはれに	形動	あはれなり		k013				
17	3800102800	心くるしと	形	こころぐるし		k120				
18	3800102900	おほしなけきける	形	おほけなし						
19	3800103000	かしつき	動四	かしづく						
20	3800103100	たてまつり	補動四	たてまつる						
21	3800103200	給こと	補動四	たまふ						
22	3800103300	をんなみやたちと	名	をんなみやたち			536192120	女宮たち（皇女）	0660/487 0/4820/4 940	落葉の宮/女一の宮 2/女三の宮2/女四の宮
23	3800103400	ひとしく	形	ひとし						
24	3800103500	いつくしう	形	いつくし						
25	3800103600	もてなし	動四	もてなし						
26	3800103700	ぎこえ	補動下二	ぎこゆ						
27	3800103800	給	補動四	たまふ						

分類番号はある程度自動的にふることが可能だが、人物番号は先述のように手作業が多い。図の場面ではとりあえず「大殿」については分類番号・人物番号ともに手作業で、「女宮たち」については分類番号・人物番号ともに自動で番号付けが行われた。

しかしよく読んでみると文意がよくわからないのである。ちなみにこの前の部分には、女三の宮と柏木との間に生まれた子である薫の美質について述べられている。よって、「かしづく」対象は薫であると想像される。光源氏が、女三の宮と柏木のことについてそれはそれとして、薫を大切に養育しようということなのであろうが、では一体「女宮たち」とは一体誰であろうか。「源氏物語（大島本）」には「女宮たち」の用例は「若菜上」に3例、「横笛」に1例を数えるのみで、それらはすべて、図中（10の22）に示した4人の女宮たち、すなわち朱雀院の皇女たちを表している。だからこそ、自動処理で番号付けができたのだが、果たしてここもそのように読んでよいのか。光源氏が、朱雀院の皇女たちと同じように薫を養育しようというのはいかにも不自然なのである。

あくまでも「女宮たち」を朱雀院皇女たちと考えるならば、「おほしなげきける」で文を終止させ、「かしづく」主体を朱雀院とし、朱雀院が薫を我が皇女と同様に大切に扱おうと考えたことを表しているにとりことも可能であろう。ただ、通行の「源氏物語（大島本）」からは考えにくい内容である。たしかに朱雀院にとって薫は孫であるが、朱雀院が薫を養育したとか可愛がったとかいう場面はない。

そこで「女宮たち」を他の皇女として読む可能性を考えれば、紫の上のもとにいた今上帝の女一の宮が相当し、これならば光源氏が薫を女一の宮同様に大切に養育しようと考えたということで納得できるのだが、問題は「女宮たち」の「たち」、つまり女宮は複数であることである。今上帝の女二の宮は麗景殿女御腹であるから、光源氏とは直接関係がない。

つまり、いずれの可能性を考えても、通行の「源氏物語（大島本）」に見られる展開とは齟齬をきたすのである。

とりあえずは「女宮たち」の人物番号には「不明」と入れるしかあるまい。またそれは同時に国冬本独自の物語世界を示す、1つの目印にもなろう。このデータベースが公開できる時期は未定だが、利用者はこうした「不明」欄を手がかりに、諸本の独自な世界をたどることができるようになるのではないかと考えている。

参考文献

- 伊井春樹「古典文学総合事典データベース構築の試み」（『人文科学データベース研究』創刊号 同朋社出版 1988.6）
- 大谷晋也「『日本古典文学総合事典』」（『パソコン国語国文学』 啓文社 1995.1 所収）
- 中村一夫「校本・総索引としてのデータベース 『CD-ROM 角川古典大観 源氏物語』」（『日本語研究センター報告』Vol.8 大阪樟蔭大学 2000.3）
- 大谷晋也「本文データベースの新しい基準点 ―『CD-ROM 角川古典大観 源氏物語』」（『本文研究』第三集 和泉書院 2000.8）
- 伊藤鉄也「源氏物語古写本における異本間の位相に関する研究」（文部省科学研究費補助金 1998年度研究成果報告書 特定領域研究「人文科学とコンピューターコンピュータ支援による人文科学研究の推進―」 1999.3）